

鳥渡りくるころの空と思ひつつ点す目葉のひえびえ
とあり 伊藤一彦

上句と下句のつながりが独特で、しみじみとした一首に仕上がっている。目葉を点すときは当然上を向くから、しげんに空のことが思われるのだ。

橋の影流されながら留まれり緑まばゆき堤を来れば
細溝洋子

「橋の影流されながら留まれり」が印象的。強い夏の日射し。そして早い流れに橋の影が濃くくつきりとうつつている。そんな情景が読者の目に浮かぶ。

弓、柳、若月の眉 夜をこめて眉根を搔けば君にあ
ふかも 本田一弘

古典以来の和歌の技法を現代短歌に活かそうと独特の工夫をつづける作者。この作では、「弓、柳」がしなつて眉を連想させることから「若月の眉」のいわば枕詞になつている。さらに「弓、柳、若月の眉」までが、「眉根」を起こす序詞、と見ていいだろう。上句、一見分かりにくいのが、古典和歌の技法をちゃんと踏まえているとみていい。下句は、眉が痒いのは君に逢える前兆とする歌が万葉集にあり（眉根搔き鼻ひ紐解け待てりやもいつかも見むと恋ひ来しわれを）巻十一・二八〇八）、それを踏まえている。

生きてきた分だけ早くバタ足を打ちて妹を離しゆく
神 宮地瑛子

姉妹がビート板を手にバタ足をしている場面。作者の宮地さんは、たしか水泳のインストラクターをしておら

短歌の現在

No.463

今月の15首を読む

佐佐木幸綱

れる。この一首も、プールで子供に水泳を教えている場面だろう。メンツをかけて頑張る姉。必死な彼女の顔を思い浮かべて、ユーモアを味わいたい。

新しき友人なれば友人のふるさと自慢を新鮮に聞く
藤田紀美子

新しい友人の自慢ならば何でも新鮮である。熱をこめてしゃべる話題ならばなおさら。ここは作者が知らない土地の話聞いたのだらう。「友人」を二回重ねてうまくリズムをとっている。

梅雨あけて先づ梅を干す一つづつ箆にならべる千個
あまりを 長谷川静枝

今月の作は、六月から七月にかけての梅干し作りが順序を追つてうたわれている。梅の実に赤紫蘇をもみ入れて塩漬けにし、それをていねいにザルにならべて干す。屋のあいだ陽に干して、日暮れは部屋に入れる作業が一週間。その間は、梅が主人で人間は女王につかえるしもべのようなもの、らしい。朋子が梅干し大好物なので長谷川さんが送つてくださり、千個のうち何十個かは朋子の口に入る。

夕焼けを五人家族で見上げるのはじめてかもね雲の
くじらだ 駒田晶子

夫婦と子供三人がいつしよに夕焼け空を眺めている場面。そう言われてみると、家族全員が揃つて空をみることはあまりないかもしれない。下句、五人の中にはまだ小さい子供がいることを暗示して、うまい。

世の中はだいたい四角い ビル、扉、窓が切り取る